

日蓮大聖人御書全集

てんじゆうきようじゆほうもん

転重軽受法門

新版
1356
ゝ
1358

てんじゅうきようじゅほうもん

転重軽受法門

ぶんえい ねん がつ にち さい
文永 8 年 (71) 10 月 5 日 50 歳

おたじようみよう そがきようしん かなばらほつきよう
大田乗明・曾谷教信・金原法橋

しゅりはんどく もう

修利般特と申すは兄弟二人なり。一人もありしかば、

修 利 般 特 もう

おのおのさんにん

すりはんどくと申すなり。各々三人は、またかくのごとし。

いちにんきた たま

一人来らせ給えば、三人と存じ候なり。

ねはんぎよう てんじゅうきようじゅ もう ほうもん

涅槃経に転重軽受と申す法門あり。先業の重き今生に

尽 つきずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかかる

じゅうく あ そうら じごく くる 消 し そうら

重苦に値い候えば、地獄の苦しみぱつときえて死に候え

ば、人天・三乗・一乗の益をうるにんてんさんじよういちじようやくこと候。得

ふきようぼさつあつくめりじようぼくがりやく被

不軽菩薩の悪口・罵詈せられ杖木・瓦礫をか被ぼるも、ゆえ故

なきにはあらず。過去かこの誹謗正法のゆえかとみえて、「そ

つみおおとそうろうふきようぼさつなんあ

の罪は畢え已わつて」と説かれて候は、不軽菩薩の難に値

かこつみめつ見いち

うゆえに過去の罪の滅するかとみえはんべりへこれ一。

ふほうぞうにじゅうごにんほとけ除

また付法蔵の二十五人は、仏をのぞきたてまつりては、

みなほとけ予しる置たまごんじやうちだいじゅうし

皆、仏のかねて記しおき給える権者なり。その中、第十四

だいばぼさつげどう殺だいにじゅうごししそんじやだんみ

の提婆菩薩は外道にころされ、第二十五の師子尊者は壇弥

りおうくびはほかぶつだみつたりゅうじゅぼさつ

栗王に頸を刎ねられ、その外、仏陀蜜多・竜樹菩薩など

おお なん

なん

おうぼう

ごきえ

も多くの難にあえり。また難なくして、王法に御帰依いみ

ほう 弘

ひと そうろう

よ あつこく

ぜんこく

じくて、法をひろめたる人も候。これは、世に悪国・善国

あ ほう しょうじゆ しゃくぶく

見

しょうぞう

有り、法に摂受・折伏あるゆえかとみえはんべる。正像

ちゅうぶく

へんど

なおかくのごとし。中国またしかなり。これは辺土なり。

まつぼう はじ

こと

さき

思

定

末法の始めなり。かかる事あるべしとは、先におもいさだめ

ご 待 そうら

に

ぬ。期をこそまち候いつれへこれ二〇。

かみ ほうもん

古 もう 置 そうら

珍

この上の法門は、いにしえ申しおき候いき。めずらしか

らず。

えんぎよう ろくそく くらい かんぎようそく もう

ぎよう

円教の六即の位に観行即と申すは、「行ずるところは

い

言うところのごとく、言うところは行ずるところのごとし

ぎょう

うんぬん

りそく

みょうじ

ひと

えんにん

ことば

と云々。理即・名字の人は、円人なれども、言のみありて

まこと

難

れい

げてん

さんぷんごてんとう

よひと

真なることかたし。例せば、外典の三墳五典等は、読む人

数

知

よ

治

振

舞

かずをしらず、かれがごとくに世をおさめふれまうこと

せんまん

いち

よ

千万が一もかたし。されば、世のおさまることもまたかた

し。

ほけきょう

かみつ

こえ

読

か

きょうもん

法華経は紙付きに音をあげてよめども、彼の経文のごと

振

舞

難

そうろう

ひゆほん

い

きょう

くふれまうことはかたく候か。譬喩品に云わく「経を

どくじゆ

しよじ

もの

み

きょうせんぞうしつ

けっこん

読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨

を懷かん。法師品に云わく「如来の現に在すすらなおんしつお怨嫉

いだ ほつし ほん い によらい げん いま おんしつ

多し。いわんや滅度して後をや。勸持品に云わく「刀杖を

くわ ないし ひんずい かんじ ほん い とうじ よう

加う乃至しばしば擯出せられん。安樂行品に云わく「一切

せけん あだ おお しん がた

世間に怨多くして信じ難し」。

きよう もん そうら よ

これらは經文には候えども、いずれの世にかかるべし

知 かこ ふき よう ぼさ つ かく とく びく み

ともしられず。過去の不輕菩薩・覺徳比丘なんどこそ、身に

当 読 そうら 見 げんざい

あたりてよみまいらせて候いけるとみえはんべれ。現在に

しよう ぞうに せんねん まつ ぼう い にほん

は、正像二千年はさておきぬ、末法に入つては、この日本

こく とうじ にち れん いち にん そう ろう むかし あく おう おんとき おお

国には當時は日蓮一人みえ候か。昔の惡王の御時、多く

しようそう なん あ そうら

しよじゆう けんぞくとう でし

の聖僧の難に値い候いけるには、また所従・眷属等、弟子

だんなとう 幾

歎 そうら

いま

推

檀那等、いくそばくかなげき候いけんと、今をもちておし

量 そうろう

はかり候。

いま にちれん ほけきよういちぶ

そうろう いっくいちげ

じゆき

今、日蓮、法華經一部よみて候。一句一偈になお受記を

被

かぼれり。いかにいわんや一部をやと、いよいよたのもし。

いちぶ

頼

こくど

思

そうら

われ

ただ、おおけなく国土までとこそおもいて候えども、我と

もち

よ

ちからおよ

繁

止

そうろう

用いられぬ世なれば、力及ばず。しげきゆえにとどめ候。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ぶんえいはちねんかのとひつじじゆうがついつか

にちれん

かおう

文永八年辛未十月五日

日蓮

花押

おおたさえものじょうどの

大田左衛門尉殿

そやにゆうどうどの

蘇谷入道殿

かなばらほつきようのこぼう

金原法橋御房

ごへんじ

御返事